

老年

芥川龍之介

青空文庫

橋場の玉川軒はしば ぎよくせんけんと云う茶式料理屋で、いっちゆうぶし一節の順講があつた。

朝からどんより曇っていたが、午ごろにはとうとう雪になつて、あかりがつく時分にはもう、庭の松に張つてある雪よけの縄なわがたるむほどつもつていた。けれども、硝子戸ガラスと障子しょうじとで、二重にしめきつた部屋の中は、火鉢のほてりで、のぼせるくらいあたたかい。人の悪い中洲なかずの大将などは、鉄無地てつむじの羽織に、茶のきんとうしの御召揃おめしぞろいか何かですましている六金ろつきんさんをつかまえて、「どうです、一枚脱いじやあ。黒油くろあぶらが流れますぜ。」と、か
らかったものである。六金さんのほかに、柳橋やなぎばしの三人、

代地だいちの待合おかみの女将おかみが一人来ていたが、皆四十を越した人たちばかりで、それに小川の旦那だんなや中洲の大將おしんぞなどの御新造ごしんぞや御隠居ごいんぐが六人ばかり、男客しろうとは、宇治紫暁うじしぎょうと云う、腰の曲つた一中いちちゆうの師匠ししやうと、素人しろうとの旦那衆だんなしゆうが七八人、その中の三人は、三座の芝居しばいや山王さんわう様の御上覧祭ごじやうらんさいを知っている連中れんちゆうなので、この人たちの間では深川の鳥羽屋とりはの寮しやくであつた義太夫ぎだゆうの御浚おせらいの話しはなしや山城やましろ河岸がしの津藤つとうが催した千社札せんしやの会かいの話はなしが大分賑にぎやかに出たようであつた。

座敷ざしきは離れの十五畳じゆうごじやうで、このうちでは一番、広い間まらしい。籠か行燈ごあんどんの中なかにともした電燈でんとうが所々に丸い影かげを神代杉じんだいすぎの天井てんじやうにうつしている。うす暗い床とこの間まには、寒梅かんばいと水仙すいせんとが古銅こどうの瓶びんにおらしく投げ入れてあつた。軸たいぎは太祇たいぎの筆ふでであろう。黄色ばしよい芭ば

蕉布うふで煤すすけた紙うえしたの上下うえしたをたち切った中に、細い字で「赤き実とみてよる鳥や冬椿」とかいてある。小さな青磁の香炉が煙も立てずにひっそりと、紫檀の台にのっているのも冬めかしい。

その前へ毛氈もうせんを二枚敷いて、床をかけるかわりにした。鮮やかな緋ひの色が、三味線の皮にも、ひく人の手にも、七宝しつぼうに花菱ししの紋えぐが抉えぐつてある、華奢きゃしゃな桐の見台けんたいにも、あたたかく反射しやうしているのである。その床の間の両側へみな、向いあつて、すわっていた。上座じやうざは師匠しぎやうの紫暁しぎやうで、次が中洲の大將、それから小川の旦那と順を追つて右が殿方、左が婦人方とわかれている。その右の列の末座にすわっているのがこのうちの隠居いんこであつた。

隠居いんこは房ふささんと云つて、一昨年、本卦ほんけがえ返りがえをした老人である。

十五の年から茶屋酒の味をおぼえて、二十五の前まえ厄やくには、金きんぱ

瓶いだいこく 大黒の若太夫と心中沙汰になった事もあると云うが、それ

から間もなく親ゆずりの玄くろ米問屋の身しん上じょうをすつてしまい、

器用貧乏と、持ったが病の酒癖とで、歌沢の師匠もやれば俳諧の

点てん者じゃもやると云う具合に、それからそれへと微禄びろくして一しきり

は三度のものにも事をかく始末だったが、それでも幸に、僅な縁

つづきから今ではこの料理屋に引きとられて、楽隠居の身の上

なっている。中洲の大將の話では、子供心にも忘れないのは、そ

の頃盛りだった房さんが、神田祭の晚肌はだま守もりに「野路のじの村むら雨さめ」

のゆかたで喉をきかせた時だったと云うが、この頃はめつきり老

いこんで、すきな歌沢もめつたに謡うたわなくなつたし、一頃凝つた

鶯もいつの間にか飼わなくなった。かわりめ毎に覗き覗きした芝居も、成田屋なりたやや五代目がなくなつてからは、行く張合はりあいがなくなつたのであろう。今も、黄いろい秩父の対ついの着物に茶博多ちやはかたの帯で、末座にすわつて聞いているのを見ると、どうしても、一生を放蕩ほうとうと遊芸とに費した人とは思われない。中洲の大将や小川の旦那が、「房さん、板新道いたじんみちの——何とか云つた：そうそう八重次お菊。久しぶりであの話でも伺おうじやありませんか。」などと、話しかけても、「いや、もう、当節はから意気地がなくなりまして。」と、禿頭はげあたまをなでながら、小さな体を一層小さくするばかりである。

それでも妙なもので、二段三段ときいてゆくうちに、「黒髪

みだれていまのものおもい」だの、「夜よさこいと云う字を金糸でぬわせ、裾に清十郎とねたところ」だのと云う、なまめいた文句を、二の上った、かげへかげへとまわってゆく三味線の音ねにつれて、語ってゆく、さびた声が久しく眠っていたこの老人の心を、少しずつ目ざませて行つたのであろう。始めは背をまげて聞いていたのが、いつの間にか腰を真直に体をのばして、六金さんが「浅間あさまの上じょう」を語り出した時分には、「うらみも恋も、のこり寝の、もしや心のかわりやせん」と云うあたりから、目をつぶったまま、絃いとの音にのるように小さく肩をゆすつて、わき眼にも昔の夢を今に見かえしているように思われた。しぶいさびの中に、長唄や清元にきく事の出来ないつやをかくした一いち中ちゆうの唄と絃と

は、幾年となくこの世にすみふるして、すいもあまいも、かみ分けた心の底にも、時ならない情なさけの波を立てさせずには置かないのであろう。

「浅間の上」がきれて「花子」のかけあいがすむと、房さんは「どうぞ、ごゆるり。」と挨拶をして、座をはずした。丁度、その時、御会席で御膳が出たので、暫くはいろいろな話で賑やかだったのが、中洲の大將は、房さんの年をとったのに、よくよく驚いたと見えて、

「ああも変わるものかね、辻番の老爺おやじのようになつちやあ、房さんもおしまいだ。」

「いつか、あなたがおっしゃったのはあの方？」と六金さんがき

くと、

「師匠も知ってるから、きいてごらんなさい。芸事にやあ、器用なたちでね。歌沢もやれば一中もやる。そうかと思うと、しんない新内のの流しに出た事もあると云う男なんで。もとはあれでも師匠と同じ宇治の家元へ、稽古に行つたもんでさあ。」

「駒こまがた形の、何とか云う一中の師匠——紫蝶ですか——あの女と出来たのもあの頃ですぜ。」と小川の旦那も口を出した。

房さんの噂はそれからそれへと暫くの間つづいたが、やがて柳橋の老妓の「道成寺」がはじまると共に、座敷はまたもとのように静かになった。これがすむと直ぐ、小川の旦那の「景清」になるので、旦那はちよつと席をはずして、はばかりに立った。実は

その序ついでに、生玉子でも吸おうと云う腹だったのだが、廊下へ出ると中洲の大将がやはりそつとぬけて来て、

「小川さん、ないしよで一杯やろうじゃあ、ありませんか。あなたあなの次は私の「鉢の木」だからね。しらふじゃあ、第一腹がすわりませんや。」

「私も生玉子か、冷酒ひやで一杯ひっかけようと思つていた所で、御同様に酒の気がないと意気地がありませんからな。」

そこで一緒に小用こようを足して、廊下づたいに母屋の方へまわつて来ると、どこかで、ひそひそ話し声がする。長い廊下の一方は硝ガ子障子ラスしようじで、庭の刀柏なぎや高野槇こうやまぎにつもった雪がうす青く暮れた間から、暗い大川の流れをへだてて、対岸のともしびが黄いろく

点々と数えられる。川の空をちりちりと銀の鋏はさみをつかうように、二声ほど千鳥が鳴いたあとは、三味線の声さえ聞えず戸外そとも内外うちもしんとした。きこえるのは、藪柑子やぶこうじの紅い実をうずめる雪の音、雪の上にふる雪の音、八つ手の葉をすべる雪の音が、ミン針のひびくようにかすかな囁きをかわすばかり、話し声はその中をしのびやかにつづくのである。

「猫の水のむ音でなし。」と小川の旦那つぶやが呟いた。足をとめてきいていると声は、どうやら右手の障子の中からするらしい。それは、とぎれ勝ちながら、こう聞えるのである。

「何をすねてるんだってことよ。そう泣いてばかりいちやあ、仕様ねえわさ。なに、お前さんは紀の国屋の奴さんとわけがある：

…冗談云っちゃいけねえ。奴のようなばあをどうするものかな。さましておいて、たんとおあがんなはいだと。さあそうきくから悪いわな。自体、お前と云うものがあるのに、外ほかへ女をこしらえてすむ訳のものじゃあねえ。そもそもの馴なれそ初めがさ。歌沢の浚いで己おれが「わがもの」を語った。あの時お前が……」

「房ふさ的てきだぜ。」

「年をとったって、隅へはおけませんや。」小川の旦那もこう云いながら、細目にあいている障子の内を、及び腰にそつと覗きこんだ。二人とも、空想には白粉おしろいのにおいがうかんでいたのである。

部屋の中には、電燈が影も落さないばかりに、ぼんやりともつ

ている。三尺の平床ひらどしこには、大徳寺物の軸がさびしくかかつて、支那水仙であろう、青い芽をつつましくふいた、白交趾はっコオチンの水盤がその下に置いてある。床を前に置炬燵おきごたつにあたっているのが房さんで、こつちからは、黒天鷲絨くろビロウドの襟のかかつている八丈の小こがい搔卷まきをひっかけた後姿が見えるばかりである。

女の姿はどこにもない。紺と白茶と格子になつた炬燵蒲団の上には、端唄本はうたが二三冊ひろげられて頸に鈴をさげた小さな白猫がその側に香箱かうばこをつくっている。猫が身うごきをするたびに、頸の鈴がきこえるか、きこえぬかわからぬほどかすかな音をたてる。房さんは禿頭を柔らかな猫の毛に触れるばかりに近づけて、ひとり、なまめいた語ことばを誰に云うともなく繰り返しているのである。

「その時にお前が来てよ。ああまで語った己おれが憎いと云った。芸事と……」

中洲の大將と小川の旦那とは黙って、顔を見合せた。そして、長い廊下をしのび足で、また座敷へ引きかえした。

雪はやむけしきもない。……

(大正三年四月十四日)

青空文庫情報

底本：「芥川龍之介全集1」ちくま文庫、筑摩書房

1986（昭和61）年9月24日第1刷発行

1997（平成9）年4月15日第14刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房

1971（昭和46）年3月～1971（昭和46）年11月

入力：野口英司

校正：野口英司

1998年2月21日公開

2004年3月13日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

老年

芥川龍之介

2020年 7月12日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>